

二〇一二年二月三十一日

頭越し飛ぶ売り声や年の市
単身の隣も呼びて晦日蕎麦
健診の結果うべなひ去年今年
異国より届くメールの賀状かな
退店を詫びる葉書や年の暮
子の声にふくるる茶の間去年今年

二〇一二年二月三〇日

夜回りは子らの声なる火の用心
曲がり癖ありし飾を括りけり
満天に星散りばめて年の行く
餅を搗く器械持みをな咎めそ
福音に生きる余生や去年今年
胃薬を買ひ置くことも年用意
失せ物がこんなところに煤払

二〇一二年二月二十九日

バス必死雪の轍に尻振って
咲き初めし水仙はみな海へ向く
夜廻りを終へて熱燗賜りぬ
みどりごの百面相や冬ぬくし
一日一句達成したる日記果つ
吾を呼べる今川焼の匂ひかな
日溜まりの庭石に添ふ冬すみれ
温かや足裏に文字の嬰並ぶ
エプロンの夫を助手とし節料理

よし子	うつき	雅流	有香	よし女	菜々	ぼんこ	なつき	菜々	はく子	せいじ	うつき	とろうち	花茗荷	よし女	満天	百合	うつき	こすもす	菜々	百合	よし女
-----	-----	----	----	-----	----	-----	-----	----	-----	-----	-----	------	-----	-----	----	----	-----	------	----	----	-----

二〇一二年二月二十八日

鶏の足跡氷る水飲み場
鉄扉鎖す雪の校庭静もりぬ
照り翳る障子明りの仏間かな
天国の彼にも賀状書かまほし
浮寝鳥湖のさざ波尽きるなし

二〇一二年二月二十七日

庭掃けば転びし瑠璃の龍の玉
凍て空に斯く細りたるヒ首の月
聖夜劇をかしヨセフのひげ落つる
単線に乗り換へてより雪しまく
終ひ湯に敷の手を労はりぬ
みちのくは林檎と見たる木箱かな

二〇一二年二月二十六日

今朝もまた屋根の深雪と闘へり
大漁旗追ひて群舞すゆりかもめ
青畝碑に触れてたわわや実万両
雪被く五重の塔の気品見よ

二〇一二年二月二十五日

ラジオにて第九聞ききつつ年用意
漁る鳶矢の毎落つる冬の海
と見る間にマイカー雪に埋もれけり

なつき	なつき	雅流	うつき	とろうち	三刀	はく子	せいじ	花茗荷	満天	ともえ	花茗荷	宏虎	よし女	三刀	よし子	三刀	こすもす
-----	-----	----	-----	------	----	-----	-----	-----	----	-----	-----	----	-----	----	-----	----	------

毎日句会みの選・二〇一二年一月三日